琉球大学学術リポジトリ

草稿『南洋群島の研究』［附録］第一回 南洋群島旅行日記

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2018-04-16 キーワード (Ja): 矢内原忠雄 キーワード (En): Yanaihara Tadao 作成者: 矢内原, 忠雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/37983

矢内原忠雄文庫

史料名	草稿『南洋群島の研究』[附録]第一回 南洋群島旅行日記
封筒番号	248
原文所所蔵者	琉球大学附属図書館
撮影年月日	平成 17 年 11 月 14 日
撮影者	富士写真フイルム 株式会社
備考	

矢内原忠雄文庫

封筒番号： 248

史料名	草稿『南洋群島の研究』[附録]第一回 南洋群島旅行日記
資料形態	B5原稿用紙
枚　数	100
頁　数	100
縦（cm）	
横（cm）	
厚さ(cm)	
書誌的事項	南洋 『南洋群島の研究』附録「南洋群島旅行日記」P498の記述とよく似ており、草稿にあたると思われる。 今泉分類記号： Y

第一回南洋群島旅行日記

千九百三十三年七月三日横濱出帆、九月十六日帰著。

七月三日午前十一時天城丸横濱出帆。

パンヤ向ふ。本船は三千噸餘りの貨物船で、船客定員は一等三人、八十人程、本航海は廿イパン及びテニアンへ移住の干葦船客船(沖縄県人。)

満員で、其の大部分は琉球人である。南洋行

東京・文房堂製

Kodak LICENSED PRODUCT
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Red Magenta White 3/Color Black
Blue Cyan Green Yellow
Inches Centimetres

路の定規船が神戸を起点とし、門司へ廻航したる後横濱を経て南洋に向ふのは、九州からの積み荷も相当ある外、毎航海多数の琉球人が南洋群島へ渡航するからである。

五日午前十一時半小笠原父島二見港着。晝晴半上陸、物産陳列所、植物園等を見た。蘇鉄植物、其近く行はるべき海軍大演習を控えての土木工事が南洋旅行人の人中に目に著く。

あることを意識せしめるに十分であつた。内地に憧れて無断渡航を企て、此処で発見せら

東京文房堂製

れたサイパン島のチャモロ娘一人本船にて送還。

日朝ウラカツ島を遥か左舷に望みつつ南下、晝頃あるのと距里遠き為め、火山活動の状態は見えなかつた。

八日正午サイパン(島)入港。午後二時上陸。街樹鳳凰木の高き梢の紅葉が強烈な太陽の直射に映えて呉る。其の街路を突当りの正面には一段を上りて小高く独逸時代の政廳今では城サイパン支廳として使われて居る建

物があり、名殺の左右にはタが旅遺跡の名柱が並べられて居る。政廳の前方左側にはかの大きなカトリック教会。が聳え、其の前は莵生の廣場がある。上陸の第一印象は想像以上に堂々たる近代的市街であつた。

數歩して此りがパン街の大通りに出ると二十台ばかりのタクシーが並んで居るには更に一驚を喫した。聞けば此の島には丰十數台の営業自動車があつて、而かも此の一二年來急に殖えたのであるといふ。

東京文房堂製

余は南洋興発会社の客となり、會社の所有地なるチヤランカに案内せられ俱樂部兼客室に泊められた。がうパンからチヤランカ迄約三哩、十年拡張工事の出来た坦々たる大道が海岸に沿うて通じ、自動車で走る便利地(道路を通じ)だ。

あり景色もよい。

チヤランカは樹木鬱葱として、殊に事務所から工場に到る間のカマチリ樹の並木が美しい。此の会社建設の時に植えたのだそうだが十年間の繁茂はさすが熱帯地方なればこそだ。

東京文房堂製

倶樂部の庭には此の島名物の大蜥蜴が居る
さうだが、余の眼には附かなかつた。ただ夜
更けたトタン屋根の怪音は先生の足音だつた
のかも知れない。
一週間の船内の束縛を脱し、靜かな休息の
一夜を感謝した。
サイパン支廳の案内で
九日・此の日は日曜日だから早朝がサイパン
街のカトリック教会の礼拝に行つて見る。(参観。)約
五百人の満堂の盛況。男女共晴衣を纏ひ、殊
に女子の服装はスペイン風。とでも言ふかゆる

東京 文房堂製

はつちりだ。

其の翌日それから島民の家庭訪問に出掛けた。作表的な上流、中流、下流の住家を訪ねた。

(1) 上流家庭の二三を訪問した。

西アダ家。(こう一流はつづく)

数段の石段を上れば廣間であつて椅子テーブル等の調度あり、一隅には大きな古物だがピアノと大型の蓄音機が備えられ、カブト貝蝶貝等の装飾品も置かれて居る。

壁には我両陛下の御肖像を始め数箇の額が掛かつて居る。之は内閣顧問とかいふ、ものが日本から来島して賣り擴めたものださうで、他

東京文房堂製

ふ。此のアントニオは我海軍がサイパン島占領当時の代表的事業家として文献に記されて居る人であるが、一九一七年ニ十七才で独身のまま死亡したさうだ。アントニオの父は即ちアダ家の先代で男子四人女子五人計九人の子供があり、アントニオは其の中の一人であつた。我海軍の占領当時にはアダ家は此の島も石鹸製造の工場を営み、又かなり大きな雑貨商を営んで居たのであるが、其の後石鹸製造業や椰子の樹がカイがら虫の被害にあり

東京文房堂製

た時止め、雑貨商も止めた。（閉鎖して）
グアム島に引上げ、（た。）彼の地では現在も名鹸製
造の事業を営んで居るさうだ。一体サイパン
とグアムとは台湾と福建との如き密接な関係
にあつて（つゝ）、双方にまたがつて親族関係が濃厚
であり、人の往来も常に多いのである。

先代アダの未亡人は未だサイパン島の此の
村に住んで居る。六十五才だといふが（、）見た処
七十五才乃至八十才位（に）を老けて見える。此の
家の主人であるゲレロ氏は先代アダの第三女

の夫であつて、今此の家の留守を預つて居る
のであるといふ。アダ一家のサイパン島に於
ける所有地は約九十町歩。（先代死亡後）であるが、未だ人名
命につき未だ相續が行はれないが、（やがて）これ皆
配する時には男女を問はず（それの）子供に均分（配）する筈
である（が）といふ。子三女の夫ゲレロ、巧みに獨
逸を解す。
今の主人公（実は留守居役）ゲレロ氏は一
寸と杉村陽太郎氏を連想せしめる様な肥大漢
であつて、年齢三十五才といふが、外観四十
五才位に見える。チャモロの人々は三十才を

旅行記

―昭和廿八年七月九日午香様家庭の訪問―

十

ゲンロ氏（前出の筆）

十一

(2)、
漆原ガラパン機長の家。行く。此の住家は
中等、廣間の陽にミシン十台あり。主人(は)
卒業一色助役を兼務。年齢は七十才。十三児
を生み、其の中五人死し八人生存。して居る。

東京文房堂製

此の人はグアムからサイパンに移住して来た最初の一人、一世帯の一人、スペイン領時代から助役の様な仕事をし、独逸領時代も日本統治に入ってからも引続き助役であった。が、最近前村長死亡したについて村長に任命せられたものである。此の人の所有地は六十町歩、中蕉作四十町歩、椰子二十町歩、自分とで供芋として自作して居る。貸地は一町歩あるが、之は主人の知らぬ間に長男が勝手に貸したのだと不平顔であった。スペイン時代、

東京 文房堂製

香で、総じて此の家はチヤモロ族中保守的な
中産階級に属するとの印象を得た。

次は(3)、ヘリナアン。パン
此の人も助役（第二位）である。主人はグアム女生
まれ、ガアムで結婚した。その母親はスペイン
人との混血。であり、主人の容貌もネペイン人
の面影がある。子女十人を生みその中四人は
幼時歿。長男は（卒業）小学校を終へた後日本に
も三年ばかり居たことがあり現在サイパンで
チヤモロ會の會長、もして居る。此のチヤモロ

（頁）
―共済的信用機関―

と。會長閑係のものは別として一般には郵便貯金をし度い。その理由は独逸時代に政府の營んだ信用組合の如きものあり、之に預金して居たが、戰爭後此の組合が倒れた為めに預金の返礼を受けることが出来なかつた。之に懲りて郵便局に預金することも不安である。千ヤモロ会への出資は我々仲間のことだから心配ないとゆふことであつた。

次男はサイパン公學校の助教員、長男も次男も共に日本語に巧みである。主人は二十二

東京文房堂製

妻は二十六才にて結婚し、次男は十廿妻十才にて結婚した。次男は今年三十才位と見え
るが五児を生みその中一人死也。

主人の所有地は六十町歩、中四十町歩は興
発会社に貸地。其貸地料は十町歩
拾五円であるが、之は十年前の契約で今年又
は明年に満期になる。今日の貸地料の納額は
相場は一町歩就拾五円乃至参拾円であるが自
作農の方が有利だから此
は最早貸地
はもはや貸地
はしないつもりだと言つ

東京文房堂製

本。現在ノ地積二十町歩ノ中十四町歩ハ蔗作（自作）
主人ト長男ハ農耕ニ従事シ、其他五人ノ人夫
ヲ雇フ。残リ六町歩ハ椰子林デアルガ、此ノ
方ハ誰リ人手ヲ要シナイ。人夫賃ハ沖縄人ハ
食住共（事無）シデ一円、チヤモロ及カナカハ食事付
一円、食事無シダト一円二十銭。沖縄人及チ
ヤモロ族ノ人夫ハ除草ニ適シ、カナカ人ハ椰
子ノ実ノ採取ニ適スル。
住宅ハ最近ノ新築デ門アリ、廣間ニハピア
ノト蓄音機ヲ備エテ居ル。コレ迄カラパン街

に有つて居た住宅をタピオカ澱粉製造の會社に貸した為め別に此処に新築したのだという。

ことである。此の家の特成はアイスクリーム、

チョコレート、ビスケット。主人

言わゆる對(より)グアム(方)サイパンの住み心地(良し、)を聞けば

サイパンの方が暮し安いからである。収入が多いとかと言へば「然り」と答へた。近來チヤ

モロ人は三食共米を食はねば満足しない。也

に從來の食物たる玉蜀黍又が甘藷薩摩芋を合せて

食する。肉食は主に鶏肉をあつて豚や兎は

東京 文房堂製

有。

四(内)ブランコ。家ヲ

×主人は頗る長身である女十人を生み、

中一人は幼時死亡。七九人生存す。長男は二十

六才で次は双児の女子で二十三才、最小の子

供は五才である。此の家族は『南洋群島要覧』

の口畫に寫眞の出て居る家族である。×又双児

の娘はチヤモロ族の代表的女性としてよく寫

眞帳に出て居る人である。長男も次の娘二人

も未だ結婚して居ない。結婚は当人同志の自

東京文房堂製

由選擇をもとゝしそれを教令と親とが認めるのである。結婚に際しては新郎から結婚式日の食物、新婦の衣服等を贈ることとする。

此の家の敷地（所有）十三町歩、中六町歩は沖縄人に貸（賃）。と雖も貸地料一ヶ年一町歩十円、（但）あるが、其の地味の良くない土地である。雑木

の土地に柿の樹を植え居る。前にあった樹は貝殻虫の為めにやられ、近年のは其の後の新植である。目下一回一噸の採実がある。柿の実は旬四回の採実であるから一年に四噸の

東京文房堂製

此の家の特徴も手製のコーヒーと菓子、チヤモロ人手製のコーヒーは旨い美味である。

收穫である。コプラの相場は目下噸百円として四百円の相場である。高値の時には一噸二百三十円にも上る。又低價の時は六十円位に暴落したが、現在では稍々持直した。

此の外貸家三戸、主有之を沖縄人に貸。

家賃は三戸で一ヶ月二十円。

右によつて此の家の年收を計算すれば、貸家料六十円、コプラ四十円、家賃二百四十円、計、三百四十円となる。

チヤモロ族では中華の生活であらうか。プランテの住家は高

東京文房堂製

右の外二三の先輩家庭を訪問(住)一九後

ガラパゴ街のカナカ族の住居を見て廻つた。

忠ブ上流をゆくべき一家族を訪問(内)した。丈通りに面した来の高い木造の家で数段の階段を昇降するやうになつて居る。

模したもの(木造家屋)であらう。(住)チヤモロの家を

長いテーブルを置き、廣間の中央にかなりの

片隅には中位の木製トランク一箇、小型の皮

のトランク二箇を置き、壁に野球のミット一

箇ある。(室内にあるものはそれだけ。)主人は逞しき男で裸である。赤い褌

を日本流にきちりとしめ、片腕には日の丸の

東京文房堂製

汚く無い。

此の家の裏手に椰子や蕉の屋根の掘立小屋があり、老婆がパンの実を石焼にしたりして居た。片隅は炊事場であつてそこには木の実を持つて居た。ばには其のパンの木の実を石焼にしたばかりの石が數箇並んで居る。その側に娘の婿が双腕と胸に文身したまま立つて居た。胸には大きな十字形の文身があつた。片側の板ばかりの敷いてある所には其の妻たるその家の娘が病気で寝て居た。此の家の老婆は自分の年齢

東京文房堂製

木造板壁ト夕ン屋根ノ床ノ高イ家ヲ有ツテ塗壁ノ厚サモ八寸カ九寸ハ表通リニハ十軒モ、裏手ニハ一つ棟ヲ異ニシテ十軒ガ双方ニ別レテ住ンデヰル。

家族ハ大キナ相違ガアル。

時勢ガ変ッテ、此ノ頃ハ女ノ子ハ生マレテモ、三人ニ一人ハ死ンデ仕舞フ。

一人ノ女ガ四人ノ子ヲ生ムトシテモ、其ノ中ニ男ノ子ハ一人カ二人シカ生マレナイ。

時勢ガ変ッテ、此ノ頃ハ女ノ子ハ生マレテモ、三人ニ一人ハ死ンデ仕舞フ。

一人ノ女ガ四人ノ子ヲ生ムトシテモ、其ノ中ニ男ノ子ハ一人カ二人シカ生マレナイ。

家族ハ大キナ相違ガアル。

木造板壁ト夕ン屋根ノ床ノ高イ家ヲ有ツテ塗壁ノ厚サモ八寸カ九寸ハ表通リニハ十軒モ、裏手ニハ一つ棟ヲ異ニシテ十軒ガ双方ニ別レテ住ンデヰル。

東京文房堂製

裏手の掘屋の方に住むを好み、表通りの建築家屋には若い者が住むか、或は来客の為めに使用する。勿論之はカナカ人の上流のもので あつて普通は掘屋だけである。石焼の炊事場が一戸の家について居るのもあり、又共同炊事場になつて居るのもある。屋根の地面近くまで小さい入口の一つしか無い内の真暗な防風小屋、地面に莚を敷いた月経小屋、中央カロリン諸島等のトラック地方から移住した者の行はれた事も見逃して彼等のことを示して居る。或る裏家にトラック

老人が四人居て、トラホームに特有の裂耳が私の目をおいた。之は（娘婿の）トラホームから近頃親戚の家へ遊びに来たのだという。

七月十日。

今日は公学校、（並に）癩病院、民間の小會社等の（企業）視察。

公学校の校長岩崎氏は島民教育に就て見識があり、ゆっくり視察してくれというので朝から午後二時頃迄公学校の視察に当てた。校長の教育意見の中にて注意を誘いたのは花の

（もー一人の老人を見たが、

東京文房堂製

前着の方が却つて賣れるといふことである。

病院を辞してから、ガラパン民間會社を廻る。

（視察した事業は）

先づアダ製油所、（立ち）昨日訪問したゲレロ氏の（工場。）

（もとアダ石鹸工場を利用して）

肪肥大の身体が暑さうに勞働して居た。此処

（の如き事業多数発展）は一昨年十一月頃南始、製品は東京に直送し

て賣れるといふことである。

（それから）

次は南洋貿易株式會社へ立寄、（を）訪れ、それ

から南洋タピオカ澱粉會社（へ）視察しかへ（立ち）も

（昨年十一月頃から事業（開）始め（た）のであり、沖

東京文房堂製

縄縣人の同郷者一團の事業である。次には大洋株式會社が行つた。此はパイン製造事業であつて、パパイヤの果實の皮にナイフで傷をつけて流れ出る汁が見る間に凝結するのが面白い。此の會社は約三十人の沖縄縣人の小作人を入れて居るが、それとの間の勞働者の取扱ぶりに惱んで居た。

更に南洋群島珈琲株式會社(も歷訪。)此は東京文房堂製

10—20

とである。但し目下は事業休止の時期であり
すみやかりして居た。丈で今日の見学を終り
夕方宿舎に帰る。車を経て隣りの南洋興発
水産株式會社鰹節製造工場で静岡県出伊豆
から来た職人の掛聲が聞えて来る。此の會社
は南洋興発の娘會社であって、此の鰹節工場
はつい最近出来たばかりである。
夜海岸ボート・ハウスの前でカナカ人の踊
りを見物。椰子の実の焚火に照し出され
た、カナカ壮年の逞しき裸体美が椰子の葉の
ひらめく歓迎の為めの踏舞である。

たるがるパン街興発倶楽部

東京文房堂製

新しい繊維を頭や腕又足蹠等につけ、拍子活溌にポンポンと胸を打ち、上肢を打ち二列横体又は従作に変化して踊る有様は見ても厭き無い。踊りながら歌を歌う中に日本語の歌詞もあった。後で聞けば私の為めに特に踊り乍ら歌ふのだとの上手な者を集めて半公式に踊って見せてくれたのであった。

七月十一日。

今日はチャランカの南洋興発会社の製糖工場（並に酒精工場）を見、それから次

一農場を廻り、各所に散在する小作人の

東京文房堂製

八丈島小笠原島沖縄福島山形等出身の代表的なる小作人の家を歴訪した。何処でも茹玉子鶏肉ビール抔を進められた。但し也は私をもてなすというよりも私を案内した會社の農場長等を歓待するかの如くに見えた。第一農場、第二平坦地の最良耕地四十町歩を地均して臨時飛行場を作り大きな賦假格納庫が立つて居た。

此の夜はチヤランカの興発會社のクラブに泊る。庭木がこんもり茂つて名物の大蜥蜴が居るさうだ。

東京文房堂製

七月十二日。　今日は興発會社の第三農場廻り、多くの小作人の家を歴訪してその移住後の経営状態を聞いた。序に島を見物、またサイパンの様な島にあるかと思ふ位雄大な洞窟である。夕方がラパンに帰る。

七月十三日。　午前濠雨の為め外出出来ず、午後カトリックの宣教師を訪問、小柄な米人の僧さんは一九三〇年にサイパンに来たのだといふが、私は島民の宗教道徳、結婚

東京文房堂製

酒、踊り等に就て質問した。答へてはくれたが要領を得ない点があり熱意が左かつた。

それから直ぐ前の並にミッション・スクールを訪問。

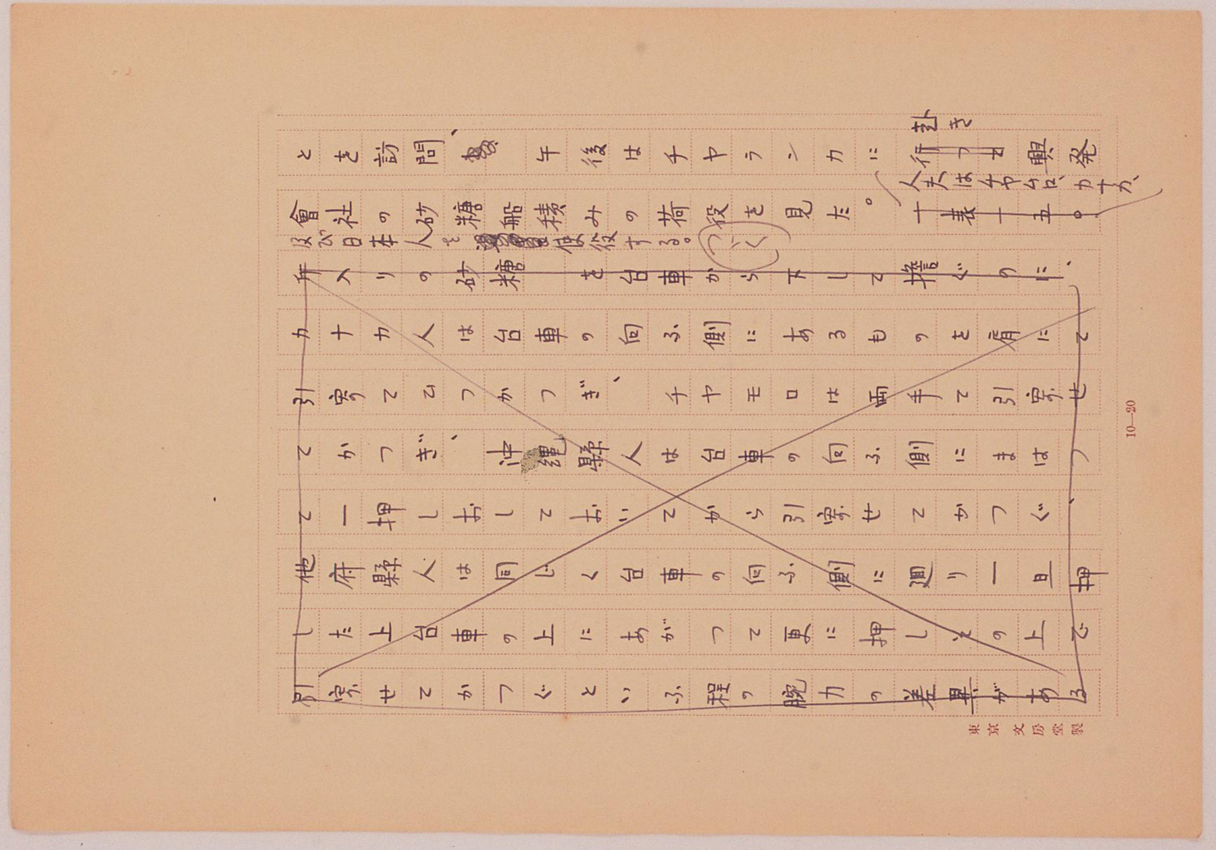
そしてヤモロを母とする混血の尼さん一名、スペイン人の尼さん四名、日本人を交へて計五名が先生で、生徒は三百四十名程あり、男児は七才迄は来ることを許すが大部分は女子の学校で、読書(チヤモロ語)、算術、図画、刺繍、ピアノ等を教へる。此のスペイン人の尼さん達は五年前に渡来して此の学校を創設したのだとか、

私に對する應待は十分の誠意を認められ
やに感じたので餌を多くを質問しないで引拳
ザた。右スペイン人の僧さんも尼さん達もス
ペイン語とチヤモロ語の外は一つも解らず、
全体の調子が誠意に乏しく感ぜられて、スペ
イン人のカトリック宣教師なるものの第一印
象は餘りよいものでは左かつ左。

次に産業試験場を分場を見學した。甘藷の害虫
等に就て標本着きで説明を受けた。

七月十四日。午前はサイパン支廳と刑務所

東京文房堂製



ホンダ カナカの人夫はよく働き一日二円五十銭位の稼ぎ高になるという。それであるから荷役に着手したかしないかは猛烈なスコールがつた。その為め荷役は来ず忽ち中止となり私は倉庫事務所に非難した。室内一面の蠅の大群に驚いたが、それよりも此処の人々がその中に平然として居るのに一層驚いた。蠅取り液を散布してくれてお茶が一杯のめた。雨の中をガラパンに帰る。

七月十五日。午前サイパン法院を訪問。澤

假委嘱領事に面會した。島氏は日本の統治

と独逸の統治とを比較して、日本の方が島民の人格を重んじ公平であるが規則の多いのに(猶芽は何処)は困る。何故とんなに規則があるかを理解しないという話であつた。(法院長の)

午後二時四十五分サイパンに別れを告げ、テニアン島に渡る。六十噸の小蒸艇汽船で海狭の早瀬を越す時はおどろかれてあやうく吐吐を催すところであつた。六時半(やや)テニアンに着いて助かつた。興発會社のクラブに泊す。(宿)

東京文房堂製

七月十六日。午前倉本農務長の案内で農場を一巡し、會社直営の農場及牧場を見た。午後二時泊所に帰る。目下は製糖終了期であつて會社は大多忙を極めて居る様子である。賃金と原料代の拂ひだけ三十五万円に達し、その大部分は沖縄縣人の郷里送金となり、そして沖縄では墓をたてたり家を建てたり、村の人や親戚を招いて酒を吸んだり、不生産的に消費せられるものが頗る多いということである。

東京文房堂製

七月十七日。會社の農業移民藤原氏の案内
オ一オニオミの農場を巡視し、福島、山形、
沖縄、奄美大島、及八丈島出身の農業士(小作人)を訪ねた。
地中其の家族の狀態、移住の動き、移住後の
維持的関係等を聞き正した。オニ農場アスリ
ートにタが族の遺蹟たる石柱を見た。ソンソ
ン市街地にも同様の石柱が六基つつニ列に残
つて居る。

七月十八日。午前サイパン支廳へ出張所を
訪問。(午後)此処は藤原氏の案内でマルポ島民部落

東京文房堂製

を経てライオン岩に登る。（攀、テニアン全島を鳥瞰した。）マルポには相当沢山のパンの木があり、バナナやタロ芋の畑もあつて、前には相当人の住んだと思はしむるが現在では僅に三戸だけ残つて居る。彼等はスペイン時代フイリッピンから来たと言つて居た。きたない小供等は鉛の小さい十字架を頸にかけ、敗屋にはマリアの画像が懸けてある。彼等も一かどのカトリック者のつもりであらう。

七月十九日、二十日。曇雨降り續き、外出出来ず且つ定期船の入港も遅れて空しく滞留。

午前讀書に費やした。

七月二十一日。やうやく筑後丸入港。午後六時上船。風波高き為め艀舟から上れず荷物同様モッコで吊上げられた。夜十一時出航。

テニアンはカマチリ、鳳凰木、合歓木の多い。しかし町だ。島民の住居など至つて單調平凡な社會と自然で見るべきもの少なく、其の上荒天つづきで且つ汽船の入港が後れたので全く退屈した。やつと廣海に浮び出て樂しかつた。

東京文房堂製

七月二十二日　曇

振便　不眠。

七月二十三日　終日雨、天候状態依然不良である。ヤップ入港後ウルシイ廻航せよとの命令が南洋廳から本船に入電。船長も船客も何事ならんかと首をひねる。

七月二十四日。午前八時半ヤップ入港、十時上陸。トミル湾に入る時の印象は全く倫敦的であつて海岸に立ち並ぶ椰子林、その間に見えるバイ

東京文房堂製

カキ道ス
及バズ

の斜に
の鋒は突出した木葺屋根、リーフ内の
青海原、海の色の青さ、あざやかさ。
数条縦走の海、「南洋へ来たな」との聲が期せず
して船客の唇に上った。本船がトミル湾に錨
を下すと間もなく支廳長以下役所の人がどや
どや船に来て何れも忙しさうに。
様子。島民の多數がのの島民
材木条 青竹數百本、飲料水數十瓶、椅子などの
調度品食料品等、多數の荷物を積み込む。近日
ルルシに碇泊艦隊入港し宮殿下が上陸
上陸せられることになつた為の準備の
為めに、本船は之等の材料を載せて同島に回航を命せ
られたのである。

東京文房堂製

命令が突然、拓殖省から来た。何分ウルルシには島民の人口も少なく物資もないのでヤツプ本島から御上陸の桟橋や御休憩所の設備の材料を輸送することになり、その為め島民を特勵して之だけの材木を一日か二日の間に伐り出したものであるといふ。そこで航海中の本船に對し臨時ウルルシ廻航の命令が来たわけであつた。

陸

十時ヤツプに上陸。支廳に少憩してから公學校に行つた。此処はサイパンとは異り、女

東京文房堂製

性は皆衣服を着けて居るが男児には裸の者も多く、上級生の中には離島から来た十七八歳の大きな青年も交って居た。校長高木氏は今年五月テニアン小校から轉任して来たばかりである。男子又女子の寄宿舎を見、カトリック教會にも行ったが、スペイン人の僧さん二人とも島民語の外を解せず通譯も居なかつたので十分要領を得なかつた。

海岸の有名なバイに行く。（つづき）

建築に十年を要したといふ大きなものであるが、今では

獨逸時代の未にほぼ落成したものだ、

の業で葺いた屋根は荒廃の様子がある。
店吊してあつた俵貨も下に落ちて半壊の状態
（外に沢山並べてある石貨は写真で御覧なさるから）
である。澤山並べてある石貨は写真で御覧なさるから
のものであるから差程珍しく感じなかつたが、
ガイドの中に吊してある幾つかの空瓶は意外で
あつた。恐らく装飾の為めであらう。
ヨロニーから此処へ来る道は名の数詰められ
た道路であるが折からの雨に濡れて靴が滑つ
て歩き進くあつた。
道路から少しく離れて木立の中に島民の家が疎々としてある。

事迹二ハバス

士を訪れたが人影一つも見えない。和人の近づくのを見て皆林の中に隠れるのだという。

室内を覗けば真暗な中に蝶貝柵子縄茅が財産の壁に懸つて居るのがほのかに見える。疊一

畳位の小さな蚊帳を吊つてあつた。

道に沿つて新築の土人教授所があつて、傍に腰掛の娘が四人ばかり籠を編んで居た。之は近頃職業奨励の為め殖民局で強制的にやらせて居るものだが、何とか彼とか申訳を設けて進んで出て来ないさうだ。

東京文房堂製

医院長萬井氏を訪問、待ち兼ねて居住せられ、流石此の島に長く且つ島民の衛生状態、社會状態の熱心な観察者であるだけに、何を質問しても話に骨があつて面白く且つ有益であつた。

(その話は面)

目今は島民の部落の事まで知つて居る。又島民の生活に就ても医者としての特権としまして大低のことは知つて居る又知ることが出來る。

ことに就ては何処に椰子酒が隠してあるかといふ事まで知つて居る。又知る女に

事は聞くことが出來る。

東京文房堂製

此の汽船はヤップ寄港の期間が短いのであるが、この次ぎは新めてヤップだけ見るつもりで来なさい。自分の所に泊って自分も一緒に部落を廻らうなどと言ってくれた。

午後四時半乗船、六時出帆。支廳長以下役所の人二十餘名島民五十餘名と前に並んだ村

料飲食物を乗せてウルルシ離島に廻航、百浬の後帰着である。私はかなり身体異和の為め、遂に

ヤップの視察がこれだけで失ふ。

発熱、全く食慾を失ふ。船後腹痛

東京文房堂製

七月二十五日朝九時ウルシ列島中のモク
モクに到着。（ヤップより建築材料調度品並に苗を陸揚。）
中に投じ乗せて来た島民が乗込んで出を待ち
組む。其他の品はカヌーで陸上げに着手した。（も同様陸揚。）
終に同じ列島中のヤンープ島に着。（次で）也は二ケ
所分の控へを同じ方法を船から降し、ヤップ
支廳の人々も下船せられた。東部にも船客を
寸上陸する時間があつたが、私は遺憾ながら
その体力がなかつた。
再び南に進路を向けた。夕方六時出帆、

東京文房堂製

七月二十六日。　木部病気状態の続。今夜発航海。私は病気。

熱八度六分、平熱の低いものたゞ発熱しなゝ

私としては珍しいことである。

七月二十七日。朝八時パラオ島コロールを

到着。幸に午前中熱して無事上陸出来たのは

喜ばしくあつた。南洋庁役人及独逸人宣教師

を前に一面識あるレンゲル芽出迎へてくれた。

常磐旅館に泊る。今日は由木パラオ滞泊中

聯合艦隊乗組将校の歓迎會が催されその

島民の踊りがあるといふことであつ

東京文房堂製

たが、私は未だ見に行く事も出来ず、旅館に静養した。ヨロールの道路はリーフをくだいた白い砂を敷詰め、太陽の直射が眼を眩ます。後で聞けば此の日の島民の踊りに就ては役所と宣教師との間に問題があつた。パラオの島民は今日では衣服を着用するもの多く、殊に女子は以前の腰みの半裸の状態にあるものは全く稀にしか見当らない。又固有の踊りも殆んど忘れた状態である。然るに役所は歓待歓迎の印として今日の踊りを催し集の踊りを止めない

東京文房堂製

島民の女に腰みのを着けさせ、数日の練習を重ねさせた。そこでカトリックの宣教師が役所に来て島民の為めに踊りの中止を請願に来た。役所では官廳の行政を妨害するものは云々。先づこのようなことであつたのださうだ。

此の日は南洋廳に松田長官を訪問しただけで旅館に靜養。とても暑かつた。

七月二十八日。雨。南洋庁及びパラオ支庁を訪問した外は、午後パラオ支廳長を訪問、終日旅館に休養。午後一回診する筈の逓信人宮萩順二氏(東京逓信局)来る由、其他は終日旅館に休養。

ゆき迄スペパース

「コロールは暑いからパラオ本島オギワルの自分の家に来て休養し、自分の妻の料理によつて体力を回復しなさい」と。その熱心且つ親切な勧めに従ふことに定めた。

七月二十九日午前十一時半レンゲ氏に伴はれ帆船に乗つてコロールの波止場を出た。マルキヨクから先は干潮となつたので帆船を捨て、進まぬ小舟から折からの烈しきスコールの中を通りかかつた島民のカヌーに乗換へ、途中で又先の帆船に同乗して再たマルキヨクに出所迄

東京文房堂製

東京文房堂製

七月三十日。日曜日。オギワル村の
レンゲ氏教會の礼拝に列し、有。島民老若男女
七八十人、小さいオギワル村にしては頗る多
數の出席である。レンゲ氏の懇望により私が
獨逸語で説教し、レンゲ氏が通譯した。
七月三十一日。レンゲ氏のモータボートで
レンゲ、フアイ兩氏と共にガラルド村を見に
行く。海岸の公學校や和人の產業島民の住家
等を見ながらガラルドの旧村に行く。此処は海岸
から奥に離れた小高い位置で家の配置村の様

東京文房堂製

手が昔ながらの面目を保存して居る頗る落付いた所であつて、古いア・バイが二つある。晝食の為めに立寄つた家にはみどいフランベシアの子供が泣いてゐた。レンゲ氏が短い説教をしたカイバックルを肩にしたルバク達がパンの木の下の石疊に立膝ついて耳を傾け、石疊の向ふ側には女達の一團がしやがんで聞いて居る有様は一幅の繪であつた。

夕方オギクル村の大酋長が詳服に身をかためて私の為めに敬意を表し

東京文房堂製

来た。明朝彼の家を訪問することを希望したるに、彼快諾。私に島氏の料理の準備をするようレンゲ氏の頼みに対しても彼は快諾をもつた。

八月一日。朝約束に従ひ酋長(土一)を訪問。少しく時間が後れたからであつて、途中迎への男があり、やがて其の議宅に近付けば酋長自ら途中迎へ、更に役宅に連れる横の道傍に数十名の村の娘が整列して(を表す)歓迎してくれた。のには驚いた。準備せられた料理品数(東京文房堂製の数々を

バズ

ザて見よう。タロ芋(の)料理(ヤ)棒(ヒ)水(煮と)も
椰子油にて団子にしたもの。タピオカを椰
子油にてフライにしたもの。アミー(木の実
の核)を椰子蜜で餡の様にしたもの。パンの果
木の実を椰子蜜であげて揚切にしたもの。椰
子の果を粉末にして椰子油であげた団子。バ
ナナの若いものを椰子油であげたもの。バナ
ナの熟したものを椰子油で煮たもの。鶏の丸
焼。生バナナの小さいもの同じく大きいもの
(一也は普通)ゾ以外のものには辣食(煙類)であ

東京文房堂製

Bバズ

る)。私は此悉くを一口づつ食べて見たが何れも味がよい。レンゲ氏曰く、「島民の食物もいざとなれば却々馳走でせう」と。ほんとにさうだ。

私の注文により[illegible]。酋長の命により妻は彼の女の保管して居る貨幣を袋のまま持つて来た。パウオ固有のウドウド貨幣数種其の他英米及日本の金貨数個。ウドウド貨幣に就て説明を聞いた。私は酋長に対して島民は紙幣に就て如何に思

東京文房堂製

ふかを南いた。彼曰く、「紙幣でも格別のこともなく投身するが水に沸れる時には困る」

オギワル村酋長の宅を辞して後レンゲ氏のモータボートでマルキョクに行く。此処は南オコロールと相対するパラオ本島の木酋長の居村であつてパラオの歴史に名の轟いた木村である。小さい諸公学校を訪れた後、丘の上の古きアバイに行く。三棟並んで居た中、一棟は風の為めに倒壊して、今は二棟残つて居る。

新
石畳の片隅にオニギヨツクルの偶像があ
つた。
昔此処で村議をこらして出来た物だ。
火山を埋めたそのふもと海岸に下りて大酋長の家
を訪問。
式の住宅と新築の役宅とが
ある。
ア・バイに
相談
の為め部落の集会を出て居た大酋長
レー老人は珍客入来の知らせを得て
急ぎ帰宅し、
イバックル育に朱褌だけの自由な姿をば、
慌てて洋服に靴を包んで
窮屈さうに挨拶に出て来
た。
口は大いに元の妻であつた。
ウドを見せて世辞ふ。

東京文房堂製

望してパラオの貨幣を見せてもらった。

夕方オギワルに帰る。

八月二日。雨の為め終日（滞在）。

八月三日。今日はパラオ支廳の汽艇が私を在。北端の見南を記録した。（パラオから）差遣の汽艇により雨中をコロールへ帰着。

マルキヨク迎へに来る約束の日であるから、折からの雨をおかしレンゲ氏の船でオギワルに上つたが、発動機故障の為めマルキヨク迄行くを得ず途中で上陸。レンゲ氏の召使雨中を自動車でマルキヨク迄走り役所の汽艇の

東京文房堂製

迎送を求めしめた。二時はかり経つた後汽艇
が来たのでレンゲ氏と其人達に別れを告げマ
ルキヨクを経てコロールに帰る。今夜から南
洋廳の客となつた。宿泊の便宜を与へられた。
八月四日。病院、公学校、木工、帯被産業試験所、及び鳴
視察。
昨日だけを午前に見た。
コロール大酋長
村長の役宅に行つて老(アイバドル)村長イラケツ外七名の
部落の有力者と會見した。老アイバドル
は七十八歳だといふが浴衣に兵児帯姿で元気。
脛に人魚の骨の脛飾をして居た。村長は
手首

東京文房堂製

及川

バドルの一で洋服、其他の者は上は上半ツ下はスボンの者もあり褌の者もある。一人だけ褌の者があつた。試みに彼等の宗教を聞いて見たが、外名の曲老アイバドルは天理教、其の外はロテスタント二人、（一人はリーベンツエル派）、ツシヨン、一人はセブンスデー（派）、カトリツク四人、蓋し裸の先生は無宗教だと云ふ事で一人あつた。アイバドルは天理教（一人の由来は左の如くであつた。教主前の経路を聞いた。それによると天理教の教師がコロールに来た（時、アイバドルを訪ふた時

東京文房堂製

遠訳した島民（彼は日本に来て天理教に接し
たことがあるらしい）は頼まれて、自分は天理教
のことを何も知らずに入った。が、迷い
その天理教布教師はその布教の才はおかみさ
んが主にし、主人は大工をしたり人夫をした
りして居たが、家賃不拂みにて立退きをさせ
られ、結果アイバドルの家に入り自炊
中、祭壇を設けたりして、アイバドルの家を布
教場としたが、其後ともも立退き、今は布
教はして居ない。そこでアイバドルは青年の

東京文房堂製

月自分は今はプロテスタントにならうと思つて居る。いやもうそれになつたのである。ここでもウドウドを見せて世笑ふ。

此の村吏事務所の土地はアイバドルのものだが、其の一部道路に面した所に天理教の立派な記念碑が立つて居る。併し此処でも依頼してパラオの貨幣を見せて貰つたが、アイバドルの家から持参したのは其の數少數であつた。昔コロールとマルキョクと戰ひコロールが英國人の助力によつて大勝を博し、マルキョク秘藏の貨幣でパラオ全体の値があると言

東京文房堂製

はれる有名な貨幣が賞勝金としてコロールの
有に帰したといふ、其の歴史的な貨幣が見られ
るかと多少の好奇心を有つて居たが、それは
空しき期待に終つた。

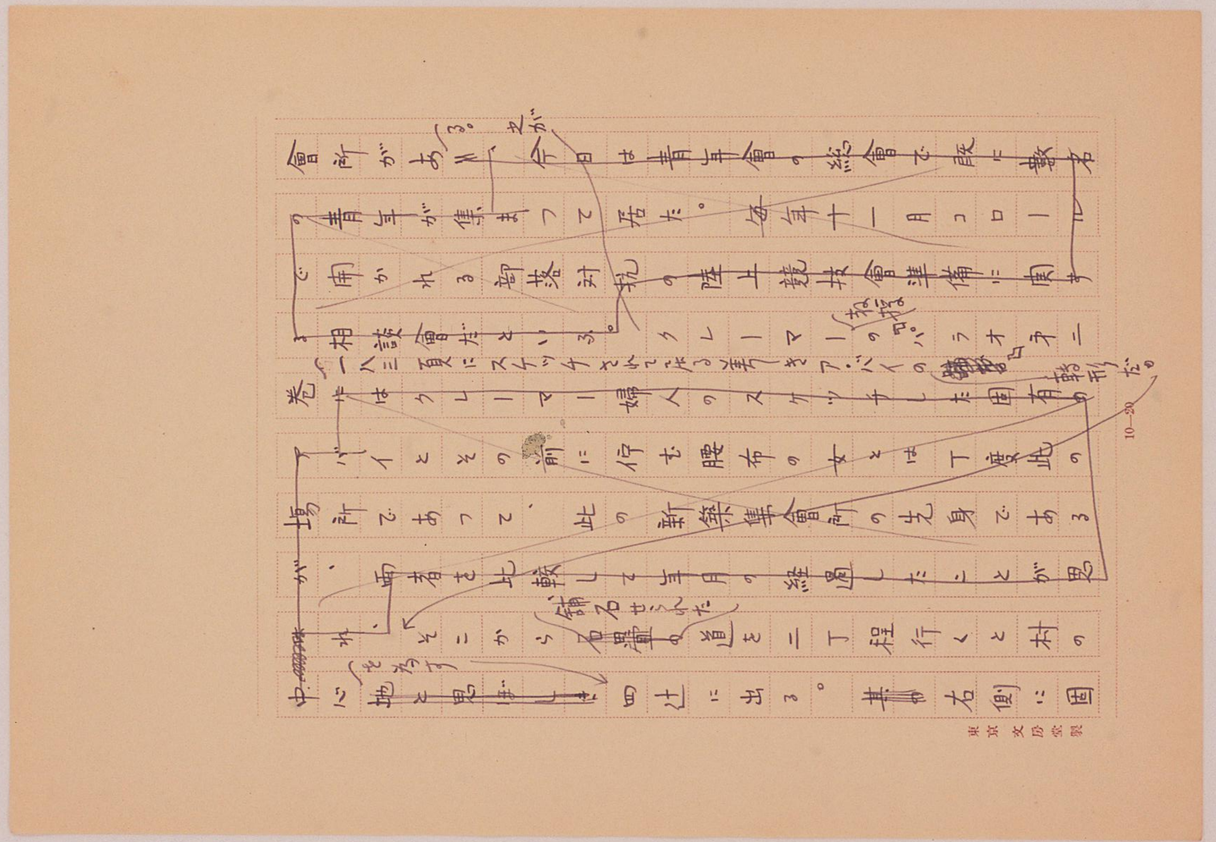
八月五日。午前物産陳列所、水産試験場、
十此処は真珠養殖場を見る。(実に)視察。
月病院に戸塚(医)院長を訪問。また。夜満月明かに
島民はコロール波止場の海岸で徹宵踊ると
か話であつたが私は疲れて早く寝た。

八月六日。朝パラオ本島行き発動船(で)に乗

東京文房堂製

本島
アイライ村に行き、冬富氏に迎へられて其
の家に行く。コロールから、アイライ迄の海上
は松嶋のやうな小島奇岩の間を縫ひ、清澄な
海水の底に高山のお花畑の様に各種の珊瑚礁
がく咲き乱れ、其の間を色も形も取々の熱帯魚
が泳ぐ有様は実にすがすがしき美観であつた。
アイライの村は書の如く落付いた閑静な村である。
波止場の側に他部落人宿泊用のアバイがあり、
此処にクバリーも宿泊したさ。
上れば近年建築の新式特殊様式の青年集

渡る。その海上は
(旧)
上陸して
数十段の石段を
せられた
東京文房堂製



富所があります。
の青年が集まつて居た。毎年十一月コロー
で開かれる郵送討論の陸上競技會準備に関す
一八三頁にスケッチされている美しきマリー婦人のスケッチ・バイの叫び
相談會だそうだ。我々は青年會の總會で既に数名
場所であつて、此の新築集會所の先見である
バイとその前に佇む腰布の女とは丁度此の
中にでもありそうな地と思ほしき四辻に出る。其の右側に国
から名畫の道を二丁程行くと村の
が、両者を比較して半月の維周したことが思
ハ、そこ
鋪名せられた
10—20

有様式のアバイが、（建物は近年改築されたもの）、
彫刻も新たにしたものをあます。その前はルバ
ク評定の場所たる石畳があり、その傍に石畳の
道を繞てて土牛相対し（女陰石等『旧パラオ』の象徴）
ン屋根の新築洗身場兼洗濯場がある。道すれ
ばて長い新田集立である。氏
（にぬへらん、その家に宿となる。）
久富氏は昭和二年南当地に移住して牧畜（を試み、
従事し 現在では五十頭の牛が居る。（此の日
は一日を休養して アイライ村（では偶々）島民の『金集め』があった。
の田に折よく当ったので土を見た。土は此家

東京 文房堂製

即ち或る家の
屋根の葺替（替の）
であるが、今日は其の落成祝兼支拂日（工賃）
である。豫め此の日を定めて屋根葺（替）
前に相談して置いた。此の家の主
人の親戚友人（は勿論此の工賃に関つる為め各自）
其の親戚友人は（此日）
たのである。其の人數は十五人。（各自が）
出した金は（陶器皿）に入れて
の出金した高を記錄して居る。（勘定）
と百十八円五十錢。（その）大部分十円（札）と五十錢銀

東京文房堂製

貨、であつたが、別に（は）ウドウド貨幣一箇（なり）あつた。之は五円に相当するものだが（て通ず）の持合せがないから代りに之を出したといふ（て置く）断り付である。最高金額の出金者は娘婿（主人の）言譯が付いて居た。

で、ある女之が貳拾円出して居る。拾円又は五円（の出金）出した者が最も多數（ために）を占めて（うて）壱円及五十銭の者（者には掛けべき）は各一人づつあつた。（それは）工事の費用は六拾円であつて、（約）差引六拾円（は此の家の）近く残るが之は此の家の主人の收入に（帰）する。主人及之等の親戚友人たる男子は宴内に集まつて居た。一方

東京文房堂製

此の家の主婦の組合仲間は各種の料理を西洋皿に盛り、外れ二尺四方程の足の付いた木の台に載せて此の家に持ち来り、室内に置き切れないので其の大部分は庭に積み重ねる。そして其の女は其の食物は夕ロ芋及び其の他オカラ多種の料理、燻製の魚、椰子蟹、パイナップル、菓子、シロップ、コンビーフ、其の他雑詰、豚一頭等を香り、芋山と盛られ、とても大がかりなものである。女の方の組合仲間も矢張之等の食物は集つた男子は此の家の主人

東京文房堂製

一部は此の場で食べるが大部分は出金高に應じて分配し、各自家に持ち帰る。工事を請負人は多く出来高を以て賃金を受け取り、一寸市馳走を食べて帰る。昔は工事を請負者が食物を調理して持参したのであるが、その負擔が余りに大となつた為め今日の様な習慣に改めた。

そして家屋の建方屋根の葺方は島原は誰でも出来る仕事であつて自分でやれる仕事であるがそれをその家の主人は自分でやらず

パラオ人に残存して多き旧慣と、その生活様式の近代化の程度が窺はれる

隣村又は同村の親友交ある人に依頼する。或は自分の方からその人で来ることもある。忽ち角面白い処に工事をやらせてくれと頼み込んで来合せて幸ひであつた。料理を食べさせようと言つてくれたが好意だけ謝して帰つた。日が暮れ月が出てから発動船で明を流びつつ帰つた。本島南部に新に臨来とコロールに帰つた。本島南部に新設せられた道路線視察の為め来て居た水養支廳長と同船であつた。

八月七日。朝八時半南洋廳の官船白鴎丸にて

東京文房堂製

コロールを出た。之は私のアンガウル及びペリリュウ視察の為めにわざわざ提供してくれた南洋庁の水産試験船でである。海上波高く目もつむる。寝たまま午後二時アンガウル着。椰子の林立する辛じて上陸。出来たアンガウル採鑛所長池田氏はうサ島十三年アンガウル十二年計二十五年の燐鑛(とふ)業(りの)生活を経験者である。快活な人である。採鑛所で色々説明を聞き夕方ぴに泊めてもらう。夜は土人の島民の踊りを観覧。ファイスモクモクモクモク椰子組二番、オレ

東京文房堂製

アイ組一番、ヤツプ組一番、腕と指の旋律が美しくあった。モルトロツク島民は固有の踊れないと言ひ加はらなかつた。宣教師の普及して居る同島民は盛んに踊つたが昔の踊りを忘れてしまつたのである。

八月八日。午前アニガウル病院、学校、郵便局、出張島民の寄宿舎、採鑛場、並に北村中村採鑛場を見た。採鑛場で燐鑛の採掘はシヤベルでトロツコに投げ入れるのであつて、普通土堀り同様の簡単な作業である。

東京文房堂製

二人一組で一車（一噸）の積負賃銀十銭、
一日の行程九車乃至十三車、假りに十車とすれば一日一円、一人（に付）五十銭の稼高となるのである。モルトロツクから来た島民が採掘して（花）十六七歳の毛むくろく模様の腰巻をした少年が、（仰）毎に空を掬ぐ潤んだ眼の表情印象が後迄忘れられない。

午後一時アンカーがウルを辞した。波が（高く、）稍々高（き為め）甲板に近付いたが、波高

地点の発見に困難し、漸く
上陸出来ず東側に船を廻し漁獲りに出て居
島民のカヌーを呼び止め其の番を借りて上
陸し、道案内を頼んで夕方五時学校に到着。
した。その途中音に聞く蚊群の
襲はれ追ひても来る蚊を追ひたたくので掌
赤くなつた。
学校の前にはアバイが二棟、一
方は固有のもので(祠式、)あるが、一方は建直して新
式集會所になつて居る。
興発会社がやりユウ島の燐鑛採掘をするに
の為に来島した東洋(の準備工事)
(東京文房堂製)

就て來島し棧橋等の工事施行の人々が滯在し
すゐる。此の燐鑛地帶は丁度部落の田畑と本
やす居る場所だといふ。アバイの前の廣場に
は日比谷公園の旧音樂堂を模したまやくりの赤角だか
小角だかの休憩所がある。之は往年觀光團に
加はつて東京見物に來た酋長が日比谷音樂堂
を見て感心して村に帰つて之れを建てたのだ
といふ。
學校長の家の夕食には柿と蟹の沖馳走が珍
しくあつた。

東京文房堂製

来るものがあると話して居る人が居た。

八月九日。

島民のカヌーに乗つてぺりり土ヶ島の北端
桟橋沖に碇泊して私共を待つて居る白鳩丸に
乗り込んだ。その間マングローブ傳ひに廿時
闇雲な炎天の下を漕ぐこと二時間、沖合碇泊の白鳩丸に集り
ながら島民の青年は海中に潜り手槍を
投げた。大きな蟹が取れた。上手なものだ。
午前十一時十分白鳩丸に乗り込み午後二時ヨ
ロールに帰着。

八月十日。午前パラオ離島を訪問。午後

東京文房堂製

アラカベ島（サンに渡り、トコトコベ部落を観た。此処は十日ベソンソル、プール、メリール等南西離島からの移住者の部落を視察した。東洋的な粗末な柏家が蝟集して居る。其の一戸づつの室のそいて見たが殆んど居なかつたこと、陋屋にカトリツクの画像が鄭重に安置してあること等、之が南西離島部落の縮図であるとすれば、人口衰滅の（縮圖と思はれ）途上にある彼等離島（の概）況に思はず眼を背けざるを得なかつた。中にもプールから来た（子供）が殆んど居なかつたことは、見るべきこの光景に、思はず眼をそむけた。

夜不眠。

東京文房堂製

一人の男、旧式に結髪したのがその十四五年の独息の病躯で寝て居る側にずつと坐つて居たのはパセチイツクであつた。トコベから最近移住した老人が床もない陋屋の入口に筵を敷いて人形を作つて居た。

夜不眠。

八月十一日。曇。午前休養、午後財務課長を訪問。夜戸塚領事に伴はれて南貿支店の宮下氏を訪問、パラオの旧貨幣ウドウドの説明を聞き質した。此の人は独逸領時代より前

東京文房堂製

から来島して居る人で、その実験談は大いに参考になった。此の夜もネ眠。

八月十二日。

地を見に渡り（視察。）全部で二十一戸入植して居るがその中三戸を訪問した。農作物はパイナップル、パラオ本島アイライ植民（甘藷、キャッサバ、タピオカ、サツマ芋、鳳梨、バイナ芋、蔬菜栽培者として成功して居る者もあった。

此の日正午私の寝まべき春日丸が入港した。

併し宮殿下御警衛の為めサイパン島に出張して居たトラック、ポナペ、ヤルートの警官の帰

東京文房堂製

仕の少要上サイパン島よりの入港船を待合せ
為め出帆は十六日とのことである。
八月十三日。午前九時コロール発、再びパラオ本島に渡る。中略カイシヤルに上陸、ガル
ドック植民地を見てマルキヨクに下り総務長
官(視察)した。
オニールの役宅に泊る。山路の徒歩三里(北海道)此
の植民地は北海道(に)(似)た山作及霜の為めに苦労の
秋(から)転住入植したものであるが、最初来たのは
千十六戸であつた。(生活習慣)移住地は山地にあつて作
物も無く物資に缺乏したため、カイシ

東京文房堂製

この日山路三里を往き、その間途中

ヤル村の島民が十度二十六戸あつて、その番戸が彼等移住者一戸づつを各自のカンパニーとして世話して居ることである。此の間に下り、彼等の役宅に一泊。

ドック植民地からマルキヨクへ行く途中山の中の島民の家で腰の曲つた姿の老婆が外出先から遅く帰つて来たのを一人見受けたが、これに唯一のパラオ滞在中見受けた婦人である。それほどまでに

パラオは近代化し、もはやクレーマーの模様当時のおもかげを留めないものである。

八月十四日。朝九時マルキヨクを出発、午後一時コロールに帰着した。此の度のガル

東京文房堂製

ドック行きも亦水産試験場の官船を提供せられたのである。

八月十五日。午前松田前長官其の他の御別れのパラオ滞在中在任長官の挨拶に廻つた。私のパラオ滞在中在任長官の更迭があつたので松田氏も前長官となつたのである。電報料値下げのことを在任中の話の一つとして語つて居られた。

午後小船でニヨウニュウドウを見物に行つた。

八月十六日。三午春日丸に乗船、東航。

東京文房堂製

を出帆。航海平穏。パラオ滞在十九日(の後)
廣き海洋に向って放せる(せうん)
(再)
八月十七日。晴。夕方船長に南十字星を教
へてもらう。太陽と共に運行して居るので夕
方十時の間水平線上に低く見えるだけである。
八月十八日。午後一時オレアイを右舷にし
て通過。
八月十九日。午後五時半エンダービー島を
右舷に通過。引き續き航海頗る平穏。海の
色(星の色)限り無く深く美しい。

東京文房堂製

八月二十日。午前十時十五分トラック夏島に入港。山口支廳長の出迎を受けて上陸。先づ支廳へ行つた。道中で行きちがふ島民がいちいち立止つて「今日ハ」と敬礼した。也は占領当時海軍の仕付けたものださうだが近頃では和人に遇つても敬礼しない者がある。

至つたとの話である。

夕ツワ村の山口宣教師を訪問。此の人は曜日のことにて夕方の集會の為め教會の午後の集會に出席、夕方支廳所在地に帰つて部

クラブに宿泊。

東京文房堂製

八月二十一日。支廳のランチで秋島まで見に行く。島民の部落はバンガロー風の改良住宅及びバラック風の小屋や、又又対に床がなく地面に莚を敷き豚犬雞雜居の低濕暗黒の極めて芳芋な住家色々各種の見本同様に並んでいた。島民の女を集めて円陣を作り四手網で魚を取る眞似事をさせて見せてくれた。又川嶋宣教師の家を訪問。午後は夏島に帰り病院、カトリック教會、公學校を訪問。午後四時乗船、五時出帆。

東京文房堂製

八月二十二日　曇。終日航海。昨夜睡眠依然として不良であつた。

八月二十三日。午前十時ポナペ（島コロヂに）入港、十一時上陸。私と同船して来た新任支廳長野田生徒出迎の為め波止場は大いに賑つた。居住民の雨傘をおかりして産業試験場及びジョカージ部落を視察した。コロニヤに帰り横田氏の官舎宿泊。

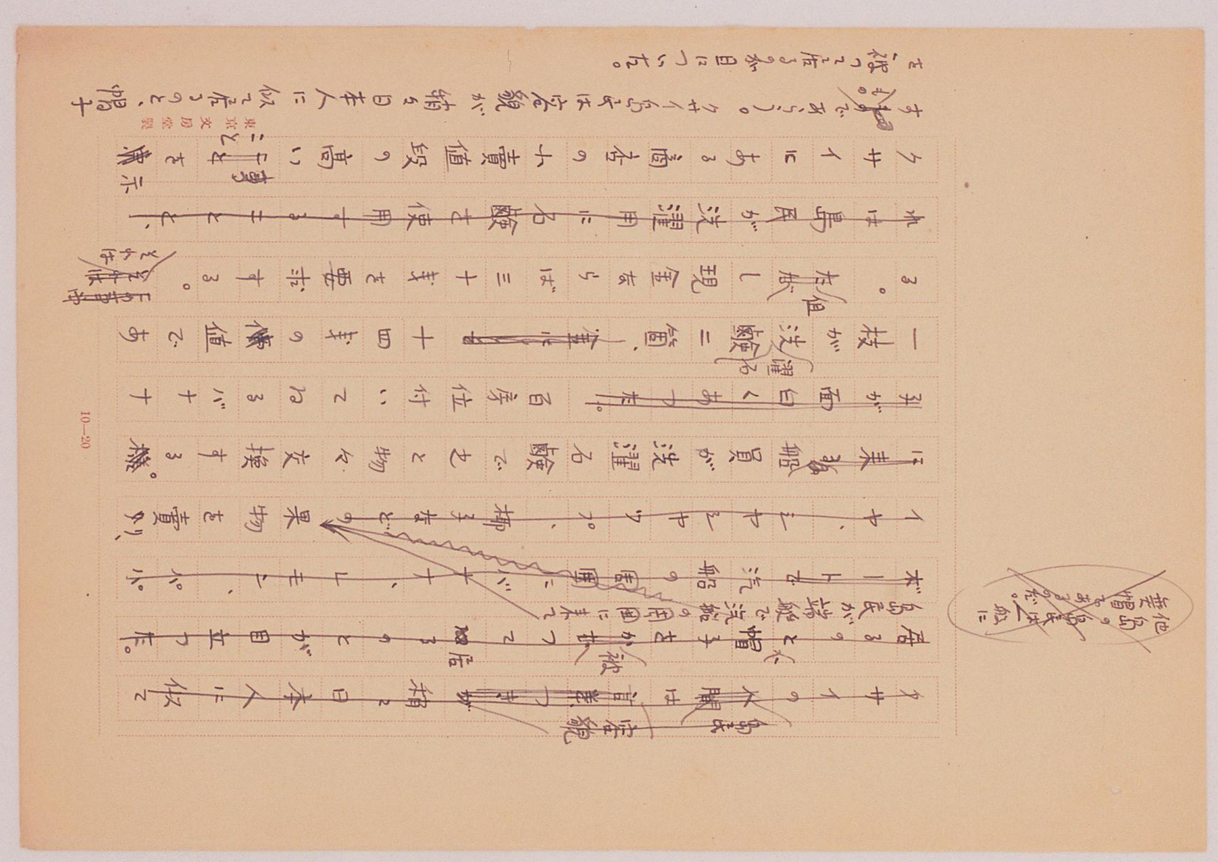
八月二十四日。朝公學校を訪問。私の為めに生徒の學藝會をして見せてくれた。それ

東京文房堂製

から病院、法院、田中宣教師を歴訪し、十一
時半乗船、十二時出帆。此の夜安眠出来た。
八月二十五日。午後二時クサイ(島レレに)入港。上陸
して駐在所、公学校、石造遺蹟、教会(芽を見、)
旧黄長官(ギンゲ・ヘンリー・ジョン、シクラの家)をも訪問。
立ち寄った。午後五時出帆。クサイ居住の米
人パーマーの妻たる島民がヤルートの親戚の
結婚を祝しに行く為めに乗船した。その持参する
土産物は生牛三頭、椰子の葉バスケット製、
丸太食物数十籠。その大袈裟なことに驚いた。

島民に英語を解する者が多い。

東京文房堂製



すものである。

(敷夜引續き)此の夜も安眠出來た。

八月二十七日。午前十一時ヤルート(島ジャボール)入港。

丁度空いて居た官舍に(を提供し)てくれた。American

Board の Training School の教師を勤める平田氏を訪ひ、新教會の共勵會に出席した。島民傳道(の)場 全体の空氣が退屈で活氣が無い。それに共勵會も使用(一つ宛)ある(のもの)テキストが米國の教會用(のもの)で(ある)その儘であつて、勞働問題に對する基督教會の態度如何抔という全く

東京文房堂製

ヤルート人の解せざる事柄が多くあつた。

ジャボール
ヤルートはマーシャル群島中の諸島から或は病院へ、或は教會へ、或は遊びに出て来る者が集合地であつて、(早に)(のため)(寫眞屋)、それぞれ自島の酋長の家に(が建てた)(に)住んで居る。床下に建てゝ後から建たものは小驚小怪。

八月二十八日。

ミツレヨン・スクール(男子校)、午前中病院の視察。

午後は病院の視察。

公學校、カトリック教會(の坊さんもスペイン人であるが、)

此処のカトリック教會は私が南洋群島各地で(私がみた)

東京 文房堂製

訪問。ギルバート人 Miss Rose Hopping が十三才
の時ベーリング海のラニチでヤルート撰
ハ月二十九日。
滞在エネゴエット島の Girls' Training School を訪
ねた方。

ラニチでヤルート撰の
ベーリング海の島外
外の島では皆感じが
よかつたカトリックの僧さん達は皆感じが
倉つた。
人的な教派上の差に基く聖心派の処は幾分
な事情が知れないが、
人的な教派上の差に基く聖心派の処は幾分
ヤルート唯一のカトリックの僧坊
で、ある。
ヤルート唯一のカトリックの僧坊
で、ある。
派で、ある。
派で、ある。
里に位する。或は
里に位する。或は
あ、る。
あ、る。

東京文理印製 10—20

から十六七才迄の島民女子ニ三十名を教育して居る。此の Loftin 嬢はヤルートに三四十年も滞在して居た米国婦人宣教師 Loftin の養女となって米国で教育せられた人である。ガト私人を歓迎する為めは生徒に歌はせたのが米国の流行歌であった。此処の島民は椰子の実を汲山と雛一羽とを私に贈物としてくれた。

そこから更に弁哩島に行き、上陸して椰子の林と島民の住家の様子を見て、午後二時ごろボールに帰った。

東京文房堂製

環礁内は鏡のやうに静かだが、外海に面した大海の岸には

夕方ニヤンギールの海岸を一周した。此の絶海の孤島海抜一米、幅一町位の小島の岸に立つと外海は限り無き太平洋の波が大きなうねりを為して押寄せる。時々猛烈なスコールがあつて電光雷鳴が烈しくあつた。併しニヤボールの町は各地から入り込んだ多くの人が雑然と混じて落付のない社會である。斯かる社會の中にあつては、私が想像して来たヨハネのパトモス島の靈感も得られなかつた。

東京文房堂製

八月三十日。午後四時出帆。北より日本に向ふ。

翌日は海上に過す。

九月一日。午前七時クサイ着、疲労の為め上陸せず。午後一時出帆。キング・ヘリー（への帰路）シクラは手製のピンクローの樹のスケッチを私に贈つた。

九月二日。午後三時ポナペ入港。（ポナペ支庁の好意により、）直にランチにてタラニーム（ナンマタラニーム）に導かれ、折からの退潮に難航を續けつつ、午後七時到着。公學校長宅に

東京文房堂製

説明
ターゲット

この原本は、破損のまま撮影します。

家に泊る。

九月三日。朝ナンマタールの遺蹟を見物した後、
[illegible]コロニアの港に帰る。途中ラーム村に
上陸、島民のカマチップを見た。
らの私の為めに催ふされたカマチップと踊り
日を[illegible]見た。折から到[illegible]きスコールにあ
午後三時春日丸に帰り五時出帆。

九月五日。午前七時トラック入港。公学校
で私の為めに開かれた児童の学藝會(学藝會をしてくれた。)
(一舞踏)並に島民
の[illegible]ダンスを見[illegible]公学校の寄宿舎を(も)[illegible]
見せてもらつた。午後七時出帆。